

2014年度 東北文化研究室講演会

東北大学文学研究科発の被災地支援活動

2014年10月11日（土）13：00～16：00

会場：東北大学川内キャンパス 文学部第2講義室

- 講演1 縁側で「こんにちは」プロジェクト—共有・共感・共生空間の創世—**
名 嶋 義 直（東北大学大学院文学研究科 教授）
- 講演2 方言と向き合う—3.11被災地での取り組み—**
小 林 隆（東北大学大学院文学研究科 教授）
内 間 早 俊（東北大学大学院文学研究科 博士後期課程）
坂 喜 美 佳（東北大学大学院文学研究科 博士後期課程）
佐 藤 亜 実（東北大学大学院文学研究科 博士後期課程）
- 講演3 臨床宗教師養成の試み—宗教者による心のケアの可能性—**
高 橋 原（東北大学大学院文学研究科 准教授）

本年度の東北文化研究室講演会は、2014年10月11日土曜日13時から16時まで東北大学川内南キャンパスの文学部第2講義室で行われました¹⁾。本年の講演会は「東北大学文学研究科発の被災地支援活動」と題しまして、文学研究科の先生方の行っているユニークな被災地支援活動のうち、日本語教育学の名嶋義直先生、国語学の小林隆先生、実践宗教学の高橋原先生のお三方が中心的な役割を果たして進めてこられました3つのプロジェクトについてその経緯や課題についてお話いただきました。

東日本大震災から間もなく4年がたとうとする中、被災地では各地でなお復興へ向けた取り組みが続けられています。しかし、日々刻々と変化をとげる国内外の情勢の中、新聞などのメディアなどではそれらの活動、いや場合によっては震災について触れられる機会自体が少なくなってきたように思います。

一方今回の震災で、被災地支援における文化的社会的な要因の重要性にも注目が集まったといえるのではないのでしょうか。人々の暮らしを立て直すということは、そこにおける人々の関係、言葉、文化、価値観などがこれまでどうあり、これからどうしていくかということと大きく関わっているからです。まさにこのような分野は、文学部・文学研究科の出番だということが出来ます。文学部・文学研究科の25の専攻分野では、それぞれ特色のある研究分野がこれまでにそれぞれの

研究の蓄積をしてきたわけです。震災以降には、これらの蓄積を、人々の暮らしの再建にいか
に生かしていくかということがまさに問われてきたのだといえます。

そこで、本年度の講演会では、文学研究科の研究蓄積を生かした地域貢献活動をされている3
人の先生をお招きして、それぞれのご活動のご報告をしていただき、文学研究科ならではの被災
地支援のもつ有効性と課題について、いっしょに考えることを試みることにしました。

名嶋先生からは、「縁側で「こんにちは」プロジェクト-共有・共感・共生空間の創生-」と
いうタイトルで2011年12月から取り組んでこられた同プロジェクトについてご報告をいただきま
した。名嶋先生は、震災直後から様々なボランティア活動に参加し、被災地やそこで暮らす人々
の様子を肌で感じながら、自分にできることは何だろうかという自問された結果、このプロジェクト
を立ち上げるに至ったそうです。具体的には、名取市の仮設住宅で暮らしていらっしゃる人々を
対象にして、不定期の「縁側」集会を開催し、そこで交流を通して仮設住宅に暮らす人々同士の、
そしてその外の人々との心のつながりをつくろうというプロジェクトです。報告では、先生のご
専門である言語学、コミュニケーション論などを基礎にしながら、仮設住宅に暮らす人々のうち
にコミュニケーションを誘発するような様々な工夫についてお話をいただきました。また、冒頭
と最後に、この「縁側」の活動は被災地支援に限られたものではなく、今までより少しでも人と
人とのコミュニケーションを誘発するような心がけや取り組みを、皆さん自身がおこなって皆が
いろいろなところに「縁側」を作って欲しいと聴衆に訴えられていたのがたいへん印象的でした。

続いて小林先生と国語学研究室の方言研究センターのメンバーに「方言と向き合う—3.11被災
地での取り組み」というタイトルでご専門の方言をめぐる二つの取り組みについてお話いただき
ました。震災で甚大な被害を受けた東北地方沿岸部はたいへん豊かな方言文化を持つ地域でし
た。そのような地域の復興ということを考える上でも、方言はひとつの大きな鍵だといえます。
小林先生を中心としたチームでは、特に①外部支援者とのコミュニケーションの問題と②地域コ
ミュニティの弱体化による方言衰退の恐れの二点に注目し、方言研究の専門家の立場から地域復
興に貢献する活動をおこなってこられました。今回のご発表では、小林先生によりプロジェクト
の全体像をご説明いただいた後、まず坂喜美佳さんが①の問題への取り組みとしておこなわれた
コミュニケーション支援ツール『支援者のための気仙沼方言入門』作成の試みについて紹介して
くださいました。これは復興支援活動における支援者と被災者のコミュニケーションにおいて障
害もしくは有益となりそうな言葉を選び、コンパクトなパンフレットにまとめたものです。ど
のような言葉を選びどのように見やすくまとめるかなどの点において様々な工夫をされた様子を詳
しくお話いただきました。続いて②の方言衰退の問題について佐藤亜美さん、内間早俊さんから
2012年度と2013年度に行われ、二冊の方言会話集として結実した方言記録のプロジェクトにつ
いてご発表いただきました。この時期は震災から2年目で仮設住宅での新しい暮らしが始まった頃
でもあり、コミュニティの変化に対する不安を励ますという意味もあったというご指摘には、文
化研究による地域貢献を考える上で重要なヒントがあるように思いました。

最後に高橋原先生からは「臨床宗教師の試み—宗教者による心のケアの可能性—」というご報

告をいただきました。「臨床宗教師」とは公共的空間において人々の心のケアをおこなう宗教的専門職のことをさし、2012年に文学研究科に設置された実践宗教学寄附講座で養成されているそうです。欧米では病院や軍隊などに「チャプレン」とよばれる宗教者が駐在し心のケアなどの任にあたっていることがありますが、これまで日本ではそのようなことは稀でした。しかし高橋先生は、終末期医療の現場や被災地におけるお坊さんのカフェなどの例を引きながら、日本でも死の専門家としての宗教者が公共の場で活動する余地や期待があることを指摘されました。そして、一定の倫理綱領に従いつつそのような場で活躍できるスキルをもった人材を育成することが臨床宗教師養成プログラムの狙いであるそうです。ご発表の中では、様々な宗教・教派の宗教者たちがともに学んだり活動したりしている様子を数多くご紹介いただき、文化研究にはこのような多様な文化（宗教）の相互交流のプラットフォームを提供する役割もあることを再認識いたしました。

当日は外部からもたくさんの聴衆の方にお集まりいただき、それぞれの先生のご発表の後に活発な質疑と議論をおこなうことができました。お忙しい中、足をお運びくださったみなさまにこの場を借りて感謝の言葉を述べさせていただきます。

1) 事前告知では第1講義室でしたが、都合により変更しました。

(木村敏明)